

論説

「コロナ禍の中で「少子化」が静かに進行している。それは、結婚・出産・育児を阻む深刻な現状と将来不安との相乗作用に思える。

コロナ不安の直接の影響はない今年・上半期（1～6月）でも出生数は約43万人、昨年同期比9000人近く減った。

婚姻数は5月で3・3万件弱と「令和婚」ラッシュの昨年同月の3分の1に落ちた。



みやたけ・こう
フォーラム・ジャパン副会長、学校法人・社会医学技術学院理事長

宮武 剛

新政権と社会保障

産声の聞こえる国に

ちた。既婚カップルも不安と不況で出産を控えるのは必至だ。昨年の出生数は統計開始以来初の90万人台割れで86・5万人。「86万人シヨック」（少子化社会対策白書）と言われたが、先

典型の「母子世帯のくらし」の預け先のない母親を直撃した。半数近くが仕事を休み、働く時間を減らした。辞職・転職・就労延期も計6%。「ひとり親のつらさをこ

行きはさらに暗い。コロナ禍は社会の階層・格差に分け入り、分断を深

「子どもたちにも2食で」(給食中止で)食費が

める。大企業社員や公務員の多くはテレワークなどでしのげるが、非正規労働者、自営業者らは「接触型」の

「自分は1日2食に減らして、子どもがお菓子は買えません」(販売職パート、高校生・小学校高学年、40代)中学生2人。小学校高学年、

仕事も多く、収入減・解雇・倒産にさらされる。その

「子どもが学校に行けなくなつた。会話に入れずしていく。産声の聞こえない

唐突な臨時一斉休校は子

国に未来はないからだ。(本紙論説委員)